

18 男抱山物語

伝承地：徳次郎町

参考書籍：33



(男抱山)

男抱山は、高屋地区の西部の西根と呼ばれるところに連なっている山の一つで、富士山のように長いそそを引いた美しい山である。この山に次のような物語が伝えられている。

江戸時代、元禄のころ白沢宿（今の河内町）に「きし江」という名の美しい乙女が住んでいました。ふとしたことから徳次郎の西根に病気療養に来ていた江戸の「甚九郎」という男と知り合い、純真な愛情をもやす身となりました。甚九郎は江戸に妻子を残して来ておりましたので、里人はきし江を「あれいづら娘よ」、「不義者よ」と後指をさしましたが、それでも3里の道を毎日せつせと、いとしい男のもとに通い続けました。一方、甚九郎は、この娘をいとしの者よと思ひ、またある時は年長者のこととて、その先の分別を考えて、苦しまないではいられませんでした。そこで男は一案を考え、ある日、娘に言いました。「あなたが、そうして親も姉妹も省みずに妻子まである私みたいな者をこんなに思ってくれる誠心を、大変うれしく思います。しかし、世間の口もうるさいことですし、あなたも毎日毎日3里の道を通いつめることも容易なことではないでしょう。私をそれほど思ってくれるのなら、わざわざここまで来なくてもその思いの数々を文に書いて、毎日明の六つにそれを燃してください。あなたが心変わりしない時には、その文は紫色の煙をあげて燃えるでしょう。私は、これを男抱山の頂上から眺めて満足いたします。」

翌日から、きし江は、甚九郎にいわれたとおり、つる思いを紫の煙にたくし、甚九郎は男抱山の頂上からはるかにその煙をみて安心して療養につとめました。ところが、きし江の姉が、妹の毎日の行動に不審をいだき、妹の恋文を盗み読んでしまい、そのおどろきのあまり、巻紙に水をそそいでしまいました。

きし江は、それとは知らず、いつものように火をつけたところ、湿り気のために煙は白く立ち昇ったのです。これを見た甚九郎は、娘の将来を考えて、一応は安心したもののはやが娘の心変りを悲しみ、ただ一時もその場にとどまっているのは忍びず、荷をまとめて江戸に立ってしまいました。一方、事の意外におどろき、あわてたきし江は、その足で男抱山にかけつけましたが、既に甚九郎は見えず、ただ白々とわが家の方、白沢宿に煙が立ち昇っているばかりでした。娘は悲嘆のあまり三日三晩、食もとらず恨しい白煙をのぞみながらついに山頂の露とはかなく消えたのでした。

村人たちは、娘の純情にいたく同情して、山頂に社を建てて悲恋の娘を弔いました。その後、この社は縁結びの社として尊ばれ、女性が秘かに詣でて、かなわぬ思いの相手方の方向を望めば、その恋の思いは不思議に相手にとどくと伝えられています。

